

---

# かがみ荘へようこそ！

まーぼう

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

かがみ荘へようこそ！

### 【Nコード】

N8721C

### 【作者名】

まーぼう

### 【あらすじ】

海の見える街、紅津市へ引っ越してきた少年、黒澄零一。下宿先のかがみ荘の住人達は誰も彼もが変わり者ばかりだった・・・！！

第一話 かがみ荘へようこそ！ (前書き)

ごめんなさい、とぼくは泣いた

ころしてやる、と彼女は哭いた

## 第一話 かがみ荘へようこそ！

誰かに呼ばれたような気がしてふと目が覚めた。

一定のリズムで揺れる電車内は閑散としていて、山奥の田舎の地方線のようだ。

俺は両耳についていたヘッドフォンを外し、窓の外の景色へと目をやった。

青く広がる海。その中に大きな島が見える。

K県本土と三本の橋でつながっている離島、べにつし紅津市。

今日から俺の地元となる街である。

紅津市の歴史的背景は深くない。

十数年前にイタリアを模したテーマパークとしてK県の埋立地に作られた行楽地。

しかし、話題を集めたのは実に短期間だったらしく、そのテーマパークはあっという間に潰れてしまった。

だが、テーマパークとしては異常なほど作りこまれたイタリアの町並みに県が目をつけ、ひとつの市として独立させた。

それから紆余曲折あって現在に至るそう。

町並みが近づいてくる。

『次は終点、さんまるこ参円瑚、参円瑚。お忘れ物のないようお気をつけください』

さい』

アナウンスが鳴り響く。俺はシートから立ち上がり伸びをした。

そして今日から始まる一人暮らしに思いを馳せる。

海の見える高校に行きたいというのは俺の希望だった。

試験を一発合格できたら、という理由で叔父さん夫婦も快く承諾してくれた。

そして猛勉強（とはいっても、ここの学校のレベルがそこまで高い

わけではない）の末、無事に紅津市立参円瑚学園に進学できたのだ。さらに、毎日片道3時間の電車通学は辛いということで、俺だけ紅津市に移住するという運びになったのである。

「・・・とりあえずバイト探さないとなあ」

一人ごちる。叔父さんたちはそれくらい出してやると言っていたが、そこまで甘えるわけにもいくまい。

叔父さんたちには実の娘がいる。彼女に行く分を俺が持っていくようなことはあってはならないのだ。

「つまらない意地なのかもしれないけどなあ」

そうだとしても。

俺にはその意地を張り通す必要があるのだろう。

そうこう考えているうちに電車は参円瑚駅へと滑り込んだ。



予定では2時に迎えの人が駅前に来るはずだった。  
なのに。

「・・・」

駅前に行く人はまばらで、その誰もが俺を探しているそぶりゼロだった。

駅前の広場に立っている時計を見る。長針は7と8の間、短針は3と4の間にある。

「・・・遅い」

約束の時間を一時間半オーバーというのはどういうことだろう。  
最初はただ遅れただけか、と自分のトランクに腰掛けて文庫本なぞ読み耽っていたが、こうまで時間がかかると逆に心配になってきた。

上着のポケットを探り、一枚の紙切れを取り出す。事前に叔母さんからもらっていた引越し先までの地図である。

万が何か手違いがあってもいいようにと叔母さんが用意しておいてくれたのだ。本当に感謝。

「どれ、仕方ねーから一人で行ってみますかねえ」

呟いてトランクから腰を上げ、地図に書いてある行き先——『かがみ荘』へと俺は歩き出した。

紅津市は随分と入り組んだ道が多かった。

建物と建物との間に狭い路地があると思えばその路地の先にこれまた小さな広場があり、その横を川（というほど幅は広くない。水路とでもいうのだろうか？）が流れている、といったようにである。

水路には水上バスや手漕ぎの小型船（あとで聞くとゴンドラというらしい）が通っていて、この街の交通のメインとなっているようだ。街並みを見ながらトランクをころろと引いて街を歩く。

地図を見ると、かがみ荘まではそう遠くないようだ。

これなら迎えなんて要らなかったんじゃないかなんて思いながら再び路地に入った。

その瞬間、

「動かないで」

女の子の声が真後ろからしたのと同時に、背中に何か硬い物が押し付けられた。

背筋を寒気が走る。まさか、とは思うが、これはひょっとして映画とかでよく見る——。

「動かないでって言ったでしょ。大丈夫。危害は加えない」

だったらその銃を下ろしてくれよ、と声を大にして言いたかったが、俺はそんなに状況慣れしていない。

「わ、分かった・・・」と上ずりそうな声を出すので精一杯だった。

「ありがとう、助かる」

背後の彼女はそういうと硬いものを俺の背中からはなした。

「黒澄零くろずみれいくん、で間違いない？」

突然名前を呼ばれてびっくりとするも、抵抗なんてできる状況ではないので俺は首を縦に振った。

「よかった。間違えていたらどうしようかと思った」

心底安心したようにふう、と声の主は息をついた。つうか間違ってたらしヤレになんねえ。

いや、シヤレにならないのは今も同じなのだけれど。

「・・・いつまで背中向けてるの？」

「だ、だって動くなって言ったじゃ・・・」

「・・・そうだっけ」

なにやら考え込むように唸る声。続いて数秒後に「じゃあ動いてよし」という声が聞こえた。

言われてゆっくりと背後を振り返ると、俺より少し身長の高い少女が立っていた。

真っ黒な髪に真っ黒な春物コート、対照的な白い肌の少女は、腕を組んでこちらを見ていた。

「ふうん・・・キミが・・・」

状況が飲み込めない。俺が一体何だって言うんだ。

「・・・あ、自己紹介が遅れた」

思いついたように手をポンとやって、少女は言った。

「柚守有珠ゆいがみありす。かがみ荘から貴方を迎えに来た。よろしくね」

愛想笑いもない事務的な挨拶。

・・・なんだろう。引越し初日なのに俺、嫌われてるのかもしれない。

ぽかんとその場に立ち尽くしていると、少女――有珠は言った。

「駅前まで迎えに行けなくてごめん。でもちよつと今まずいことになっいて」

「まずいこと？」

聞き返すと有珠はこくりと頷いた。

「そう。率直に言うと、現在貴方の命が狙われてる」  
なるほどそりゃ一大事だ。

「……は？」

「ごめん、今なんて？」

「だから貴方の――」

そこまで言った瞬間有珠は流れるような動作で懷から拳銃を取り出した。

そして路地の俺が入ってきたのと逆方向に向ける。  
ぴたりと照準を合わせた銃口の先に、それは居た。

見た目はどこにでも居そうなお姉さんが一人立っている。

そう、見た目は普通だ。普通だが、しかし。

「やあやあ有珠。早くも見つかっちゃったねえ」

にいい、と彼女の口がゆがむ。有珠はというと銃口を向けたまま微動だにしない。

にやにや笑いのまま、女はこちらに向かってゆっくりと歩いてくる。  
路地に響くのは彼女の足音だけだ。

俺も有珠も動かない。いや、動けない。

普通のはずの彼女から発される、異常なまでの重圧によって動くことなんてできない。

「あれ、結構あっさりと捕まってくれちゃうワケ？それじゃあ……」

言って女がこちらに手のひらを突き出した。

女から俺たちまでの距離およそ5m。

女の手のひらがぼう、と淡い光を持った。

瞬間、炸裂音が路地に響いた。

有珠が発砲した音だろうか、と思ったがどうやらそうではないよう



だ。

有珠の足元から一瞬にして噴出した煙は、あっという間に路地を覆った。

「ッ……！！煙幕手榴弾かッ！」

女の声が聞こえた瞬間、誰かが煙の中の俺の手をぐいと掴んで引く張った。

振り払う暇もなく煙の外へ引きずり出される。手を握っていたのは有珠のようだ。

「走って！」

有珠が俺を見て叫ぶ。

路地の女の状況を気にする余裕もなく、俺たちは今来た方向へと駆け出した。



「なん、なんだ、あいつは」

走り続けて数分。ようやく追手の気配が消えたらしく、有珠はどこかの建物の陰で足を止めた。

息も絶え絶えな俺と、あれだけ走って汗すらかいていない有珠。

……情けねえ。

「ごめん、説明している暇はない」

言って有珠はコートの裏をなにやらごそごそとやっている。

「……ていうか、さっきの何、手榴弾とか、拳銃とか。随分と変わった趣味をしてるんだな」

「しゅみ……？」

俺の言葉に首をかしげる有珠。

俺の知っている女の子にはサバゲー趣味という子は居なかった。ましてや本物の煙幕手榴弾を持ち出してくるとは。相当ディープなのか。

それに彼女が今握っている銃が本物のはずはない。当たり前だ。さつきは気が動転していて――

俺がそこまで一生懸命考えたというのに。

有珠はいきなり俺の目の前でその拳銃をぶっばなした。

銃声と閃光を伴う、しっかりとした銃撃だった。

「・・・ほん・・・もの・・・？」

今度は俺が首を傾げたくなった。

なんで本物の拳銃や催涙弾なんかを持っている少女が居るのだろうか。

ましてや目の前に。日本に。

拳銃を放った先には何も無い。

厳密に言えば、俺が見たときには既に何も居なかった。

有珠は銃を発砲した反動で跳ね上がった銃口を戻すこともせず、上方めがけて二発撃つ。

発砲された先を見て初めて気づいた。

小柄な『何か』が俺たちの頭上にいることに。

それは俺の背後に音もなく着地する。

すぐさま俺を引っ張り、それに銃口を向ける有珠。

「うわっ、危なっ！」

それ――小柄な少女は突きつけられた銃口を見て少なからず驚いた表情をしていた。

黒いニット帽を被った小柄な少女に拳銃をつきつけている有珠。まるでこっちがワルモノである。

いや、つうか。

「有珠！こんな無関係な女の子にそんなもの突きつけちゃ」

ダメだろ、と言おうとした瞬間、少女の身体が視界から消えた。

同時に訪れる浮遊感。どうやら腕を掴まれて空へ空へと引っ張られているようだ。

「ようだ、じゃねえっ!!」

必死で顔を上げて上を見ると、先ほど有珠に拳銃突きつけられていた少女が俺の右手を掴んで壁を駆け上っていた。

ありえない。ありえなさ過ぎて現実逃避したい。

これはひょっとして素人ドッキリなんじゃないだろうかとか、トラップを置いてきてしまったとか、どうでもいいことが頭の中を駆け巡る。

そうこう考えているうちに気づけば建物の屋根の上。

そこまで行っても少女は止まることはなく、走り続ける。

俺は男としては軽い方だろうけれど、小学校高学年くらいの少女に腕を引っ張られて全力で走られるほど軽くはないはずだ。

そんな考えなどお構いなしに全力で走り続ける少女A。

どなたか知らないが男一人引っ張ったままで屋根から屋根へジャンプするあたり只者ではない。

浮遊感が続いているのは引っ張られて浮いたまま彼女が走っているからだろう。

こんなこと漫画の世界でしかないと思っていたが。驚きである。

「・・・パニックってるのかな、俺」

思っていると少女は急に急降下して、地面に降り立った。



まだ意識が朦朧としている。

どうやら大きな洋館の前に降り立ったようだ。

「だいじょうぶ？」

傍らでけろりとしている少女に心配される俺。情けねえ。

大丈夫、と返事しようとした瞬間、少女がいきなり俺を突き飛ばした。

無様に道路に転がる俺。

「なにすん・・・」

怒鳴ろうとした瞬間、少女が後方に吹き飛んだ。

傍にあった電柱に直撃すると、そのまま座り込んで動かなくなってしまう。

「おやおやあ、避けられちゃった」

背後から声がある。背筋が凍った。

振り向くとそこにはさっきの路地で会った女が立っていた。

「あんた・・・」

「やあやあ、また会ったね」

冗談じゃねえ、とぼやく。

さっきと同じように重圧がすさまじい。身体が動かない。

少女を見る。微動だにせずぐったりとしている。気を失っているようだ。

女が歩み寄ってくる。右目の奥がチリチリする。今は有珠がいない。捕まったらどうなるのだろう。

有珠が言っていた、俺の命を狙っているのはこの女なのだろうか。もしそうならば――

「動くな」

響く声は俺のものでも、女のものでもなかった。

女の背後に有珠がいる。女の背中に拳銃を突きつけている。

「あれま。背中とられちゃったかあ」

この状況になっても女は焦ったそぶりを見せない。それどころか余裕たっぷりに見える。

「うるさい。これで私の勝ち――！？」

続けて有珠が何か言おうとした瞬間、有珠の足元がボンと爆発した。「かかったねッ！あたしが理由も無く背中をガラ空きにすると思っ  
た！？」

有珠の動揺した一瞬について、女が振り向く。

女の手のひらが有珠に突き出され、有珠の顔に絶望の色が浮かんだ。

ちょうど、その時だった。



突如として身体が軽くなり、重圧から開放された。

最初は女が俺に背中を向けたからかと思ったが、どうやらそうではない。

俺の後ろ、洋館の中から誰かが現れたから、だった。

すらりと身長の高い、清楚な感じの女性。

髪の毛を片三つ編みにしており、雰囲気としては優しいお母さんである。

最もそこまで年は行っていないようだが。

女性は俺の隣に来ると、俺に向かって微笑んと言った。

「ごめんなさいね、零一くん。すぐ終わりにするから」

本当の美人さんに名前を呼ばれてどきりとしないう奴は居ない、と聞いていたがまさか実体験するとは。

女性は俺の横を通り過ぎると、今まさに有珠に止めを刺そうとしている女の肩をポン、と叩いた。

「なにしているのかしら？桜ちゃん？」

女性はにこやかに言う。彼女を見た女は硬直していた。

「ね、ねね、姉さん、これには、ワケが」

「どんなわけがあるのかゆっくり聞きましょうね？」

言うが早いか、女性はその肩を掴んだまま、こちらへと引き返して、洋館の中へ引きずり込んだ。

ばたん、と洋館の扉が閉じきる寸前に女の絶叫が聞こえた気がした。  
・・。

「なんだったんだ一体・・・」

「なんだったんだろうねえ」

真横にいた少女が言った。気絶していたんじゃないのか。

「・・・もう大丈夫なのか？」

「うん、全然へいき！」

といって微笑む。けれどニット帽から血が垂れたまま笑うな。怖い。

「つか、ここは・・・？」

「かがみ荘だよ」

いつの間にか俺の横にいた有珠が言う。

なんでこう、この人たちは気づかれないようにやってくるのかね。

洋館の方へ視線を戻すと、確かに大きな扉の隣に『かがみ荘』と書いてある表札があった。

「それじゃ、ここが――」

俺の新しい地元。新しい家。



「ごめんなさいね。桜ちゃんが暴れまわったみたいで」と、先ほどの美人お姉さんが言う。

彼女は各務茜さん。このかがみ荘の管理人だそうだ。

「ホラ、桜ちゃんもごめんなさいを言いなさい」

「・・・大変申し訳ございませんでした・・・」

で、茜さんの隣にいる、魂が抜けたような女のひとが各務桜さん。  
茜さんの妹さんで、今回のドタバタの首謀者、らしい。

「でも鈴葉は楽しかったよ！」

俺の隣でそう言って足をパタパタさせているニット帽の少女が蘇芳<sup>すおう</sup>  
鈴葉<sup>すずは</sup>。

超人的な脚力と腕力で俺を引っ張りまわした少女である。

「・・・・・・・・」

で、鈴葉と逆サイドの俺の隣に座って黙々と箸をすすめているのが  
有珠である。

ここはかがみ荘の食卓。俺の歓迎会、ということで食卓の上には多  
種多彩な料理が並べられていた。

今回のドタバタは、彼女らからすると『宝奪い合いゲーム』だった  
らしい。

新入りの俺を無事にかがみ荘までエスコートした人が優勝。食事当  
番が免除される予定だった、と有珠は言っていた。

「迷惑だったでしょう？ 始終走り回らされて」

「いえ、そういうワケでは」

つか、それより気になることが山ほどあるのですが。

ここは聞かぬが華というやつだろーか。

「今は留守にしているけど、もう一人住んでるひとがいるから、帰っ  
てきたら紹介するね！」

鈴葉が言う。なるほど、ここの住人は俺を含めて6人らしい。

まあそのほうが静かで良いのだろうけど。

「・・・ふふふ、ここで暮らす以上、静かに暮らせるなんて思わな  
いほうが懸命よ？」

いつの間にか魂抜け状態から復活していた桜さんが言う。

確かにそうかもしれない。っていうか人の考えてること読まないで  
ください。

「・・・零一は顔に出るから分かりやすい」  
ひでえ。有珠まで。

「確かにっ！鈴葉でもわかるよー！」

「あらあら」

言って笑う茜さんと鈴葉。どうやら俺はポーカーフェイスを身に着けなければオチオチ暮らしてもいけないようだ。

少しの不安と山ほどの期待を持って、俺の新生活はここにスタートした。

この街でこれから何が起るかなんて、このときはまだ知らなかった。

つづく



## 第二話 お届け物だよっ!! (前書き)

かがみ荘に引っ越してきてから早数日。

部屋の中はまだ叔父さんの家から送られてきたダンボールでいっぱいだが、ここでの生活にはだいぶ慣れてきた。

かがみ荘は大きな洋館の一室を一人分の部屋として提供している形式のアパートメントだ。

一階にはラウンジと食堂、管理人姉妹の部屋があり、俺たち店子は二階の部屋を借りている。

この間の騒動の原因となった食事当番は一日交代で、朝食と夕食を作らされるそうだ。

俺も近いうちに作ることになっているので、今のうちにメニューを何にするか考え中である。

そんなある日。事件は、突然起こった。

## 第二話 お届け物だよっ!!

ピンポーン、とチャイムが鳴り響いた。

無論俺の部屋のものではなく、かがみ荘の外付けチャイムだ。数秒遅れでパタパタと玄関へ向かう足音がした。

「・・・ん、いけね」

そっちの方に気をとられすぎてもいけない。

俺は再び自分の作業へと没頭する。

部屋中に畳まれ並べられた俺の服。今は衣替え中であつた。

「つても、畳んでタンスに入れるだけなんだがね」

誰にでもなく一人ごちる。独り言が多いのはもともとなので気にしない。

小さめとはいえダンボール二箱分の衣服たち。夏物に冬物や下着と、カテゴリは多い。

とりあえずダンボールの中身を全て取り出し、たたんである今の状態にするまで、結構な時間がかかった。

ここからカテゴリ分けしてタンスにしまっていくのだ、と思った矢先に。

「零————！！！！」

どがん、とドアを破壊しそうな勢いで部屋に飛び込んできた鈴葉がまず入り口付近のパジャマ類を踏みつけこけた。

こけた勢いで部屋の奥にいる俺のほうまでヘッドスライディングの形で接近してくる。

無論周囲のたたんである衣服も巻き込んで。

うきやーと絶叫する鈴葉。うわぁ・・・と絶句する俺。

部屋に広げられた衣服の半分以上を吹き飛ばして、やっと鈴葉は停止した。

うつ伏せでバンザイのような格好で衣服の海にダイブした鈴葉は、がばちよと顔をあげて言った。

「おもしろかった!」

「俺はおもしろくねえ」

返せ。俺の一時間を返せ。

「そんなことより、零一くんっ!」

俺の一時間はそんなこと扱いらしい。ちくしょう。

いじける俺を気にすることなく、鈴葉は続けた。

「零一にお届け物だよっ!」

「――で、なぜ皆さんここにいるのでしょうか」

かがみ荘ラウンジ。配達されてきたという俺宛の荷物は、テーブルの上に置かれ、かがみ荘の住人たちによって包囲されていた。

「なんでってホラ! 何が届いたのか気になるじゃない!？」

「そうそう。零一くん、お年頃だし・・・」

この管理人姉妹、ノリノリである。

まあ、それよりも、だ。

「おとしごろ? おとしごろだと、何か届くの?」

という鈴葉の質問に

「・・・エ○DVDとか」

って伏字になってない伏字で回答している有珠サン!?

「いい年の女の子が堂々とそんなことを言うなっ!」

念のため言っておく、俺の部屋にはDVDプレイヤーはおろか、ビデオデッキすらない。

念のためです。

「ま! そんな虚言も包装を解けば白日の下にさらされるサ!」

言いながら荷物を俺のほうへずいっと押しやる桜さん。

荷物というより小包と言ったほうが正しいそれは、ビデオテープ大の長方形をしていた。

一瞬、本当に叔父さんが一人暮らしで寂しい俺にそういう類のビデ

オを送ってきたんじゃないかと躊躇ってしまおう俺。  
だが、宛名欄を見てその考えは吹き飛んだ。

K県紅津市参円瑚2-4-6 かがみ荘

零一様

「・・・あれ？」

首をかしげる。この宛名欄はおかしい。だって・・・

「・・・差出人が書いてない」

横から覗き込んできた有珠が言う。

そうなのだ。書いてあるのはかがみ荘の住所と俺の名前だけ。差出人の欄は空欄になっていた。

「それに、下の名前しかないってのもね。やっぱりなんか後ろめた  
いモノだと私は考えるね！」

自信满满そうに言う桜さん。でも本当に、俺には心当たりがない。  
叔父さんの家に忘れたものを叔父さんが届けてくれたのだろうか？  
でもそうしたら俺に電話の一本くれるだろうし、差出人の欄を空欄  
にする必要もない。

ひょっとしたら従姉妹のアイツの仕業か、とも思ったが、アイツは  
こういう悪戯はしない。悪戯するなら直接乗り込んでくるはずだ。  
宅急便なんて回りくどいことは、しないはずだ。

そういった理由で俺は訝りながらも、たいした警戒もせずに包装を  
解いた。

包装紙を破いた中から出てきたのは銀色に輝く小さめのアタッシユ  
ケース。

それが姿を見せたとき、周りの空気も一変する。

差出人不明の郵便。

シルバーのアタッシユケース、とくれば。

「ば、爆弾・・・？」

しかし耳を当てても、ケース内から物音はしない。当然だ。

少なくとも映画でよく見る時限爆弾じゃあないな、と自分の考えを軽く笑い飛ばし、ケースを開く。  
中には女の子の人形が入っていた。

思考フリーズ。

周りの空気が一変したことを肌で感じる。

つうか、なんかすごく痛い視線感じるんですけど……！！  
ケースの中には衝撃防止材に収まるように女の子の人形が入っていた。俗に言うフィギュアとゆう物である。

パツと見生きているように見えるほど精巧な造り。凛々しい顔の双眸は閉じられている。

それが女子高生の制服のようなものを着ていたから、きっと……

「……アンタ、まさかそういう趣味だったんだ……」

「あらあら。ラウンジで開けるべきじゃなかったわねえ」

「……予想外」

「零一、女の子のお人形で遊ぶの？」

きっと皆さんの視線がこんなにも痛いんだろうな☆

「って！ちがう違う違います！こんなもの俺が買ったんじゃない  
——！！！」

「アンタが買ったんじゃないかって誰が買ったのよ！！」  
だからそれはこっちが聞きたいって！

「別にいいのよ、零くん。人には人の趣味ってものが――」

「だからそうじゃなくてッ!」

つうか茜さん、そういう生半可に温かい目で見られるのが一番キツイです!

「零」

「な、なに……」

「見直した。……違う意味で」

だから人の話を聞いてくださいお願いします!!

「零一、女の子のお人形であそぶの?」

だから話を聞けええええええええ!!!!

◇

解けない誤解の渦中で俺はノックアウト寸前だった。

降り注ぐ哀れみ、軽蔑の目。

一体何処の誰かは知らないが、これを送った奴が分かったら、全力で一発ブン殴ってやらなくては気がすまねえってもんである。

半分泣きそうになりながらも、誤解を解けるようなものがないかとケースの中をもう一度見る。

眠っているような女の子の人形と、その隣に一枚のカードらしきものが収まっていた。

「……こっちは何だ?」

と、カードを手取る。

薄く青い、免許証くらいの大きさのカードは金属で出来ていた。キャッシュカードのような、黒い磁気のラインは入っていない。一体何のカードなのだろう。

兎に角、このカードには今のところ特に意味はないようだ。  
箱に戻し、隣の眠り姫に目をやる。

うう、やりたくないけど見てみなきゃわかんないのか・・・。  
人形をそつと掴む。思ったより肌の部分がやわらかくて何故かドキ  
ツとする。

強く握らないように慎重に箱から取り出した瞬間。

彼女の背中からピンのようなものが抜けて、眠り姫は目を覚ました。

「——っ!!」

突然手の中で目を開いた人形に、声も出ず驚く。

人形は目を開くと、俺には聞き取れない速度で何かを呟きだした。

同時に彼女の瞳の中を英字が高速でスクロールしてゆく。

驚きで固まってしまい、何も出来ない俺たち。

十秒弱でそれはおさまった。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

誰も何も言いません。

高速で文字が流れることもなくなった人形の瞳が俺を正面から見据  
えた。

「え、えっと・・・」

「網膜スキャンを開始します」

喋った!と驚くまもなく、彼女は俺の掌からふわりと飛び立ち、俺  
の(文字通り)眼前でぴたりと停止した。

なんだこいつ浮いてる。そういえば彼女の背中あたりに何か浮い  
てるなーなんて考えた瞬間。

「えいっ」

彼女の掌が俺の左目に炸裂した。

「——ってえッ!!」

思わず叫ぶ。いやいや、誰だって眼球直タッチされたらこれくらい  
当然朝飯前ってやつだろう。

「痛えな！いきなり何すんだよ！！」

左目を押さえながら猛抗議。それに対するお人形さんの反応。

「網膜。及び声紋スキャン、終了しました」

シカトかよ。

網膜と声紋のスキャンを終了したらしい人形は再び俺の掌に収まり、キリっとした表情で俺を見て言った。

「本人確認97%終了。『劍耶零一』様と認識してよろしいでしょうか？」

「つる・・・なんだって？」

「劍耶零一様です。誤認ございませんでしょうか」

確かに俺は零一様であるが、つるぎやなんていう苗字ではない。

黒澄姓は叔父さん夫婦に引き取られる前からの苗字だと聞いていたし・・・。

「・・・えっと、違います、よ？」

控えめに言うと、人形は首を横に傾げたまま言った。

「そんなはずはありません。網膜、声紋共に劍耶零一様のデータと一致します」

「そういわれてもなあ・・・」

なんかの手違いで俺の情報でも紛れたんじゃないだろうか。

少なくとも俺は初対面の相手の眼球を潰しにかかる人形を送ってくるようなところに心当たりはないわけだし。

考えながら人形に目をやると、彼女は俺の右手の人差し指を両手で掴み、彼女の体、言っちゃえば胸の辺りに押し付けていた。

なるほど。さっきから感じていたやわらかさの正体はこれか。

つうか、機械なのにやわらかいところはやわらか

突如感じた悪寒に振り返ると。



「・・・ひそひそ」

「・・・ひそひそ」

「・・・ひそひそ・・・」

「ええーっ！ そうなの？ そうなの！？」

と、仲良く内緒話なんぞしている四人組みがそこにいたわけで。

「ちっ、ちがいます！ 違うんです！ 話を聞いてください！」

なんかついさっきに言ったような台詞だな。

「ちよっ！ お前も！ 何してんだよ！」

人形に向かって言うと、人形は屹然とした表情で

「指紋照合完了。『剣耶零一』様のデータと99.89%一致しました」

なるほど指紋照合かぁ。って。

「・・・もっと他にやり方があるんじゃないだろうか・・・」



一段落して。

必死の弁解の末、桜さんたちの誤解はなんとか解けたようだ。

・・・うん、解けてたらしいなぁ。

「・・・で、結局アンタはなんなのよ？」

ソファに腰掛けた桜さんが少女に尋ねた。

「私は総合戦闘支援ユニット、認識番号TLM-8700-『テイルミット』と申します」

俺のひざの上あたりでふわふわ浮いている少女―テイルミットが答えた。

「戦闘支援ユニット・・・？」

「はい。私は使用者の戦闘中のサポート及び戦闘そのものの支援を行うために製造されたものであります」

なんだか俺の間近で俺にはわからない世界が展開しているようだ。戦闘とかサポートとか。なんか物騒だなあ。

有珠の次は茜さんが質問をした。

「それで、誰があなたをここへ送ってきたんですか？」

「申し訳ありません。ここへ来る以前のメモリーにはロックが掛かっているので、皆さんにお話しすることはできません」

「零くんにも、ですか？」

「そうプログラムされています」

静まり返るラウンジ。なんとなく気まづくなって、俺が質問をした。

「・・・えっとさ、俺のことを剣耶って苗字で呼んでいたけど」

「はい。あなたのデータは『剣耶零一』様でインプットされています」

「下の名前に間違いはないんだけどさ、俺の苗字『黒澄』っていうんだよ」

言うときテイルミットは少し首をかしげた。

「・・・しかし、あなたは」

「うん、だからさ、多分間違って俺のデータが入っちゃったんだよ。送り主が住所とか間違えて――」

「それは有り得ません」

ぴしゃりとテイルミットは言い切った。

「そのようなことがあるはずがありません。了解しました。ではあなたのデータを『黒澄零一』様で再入力します」

「・・・・・・」

そんな簡単にデータ変更しちゃうんですか。

「ねえねえ、んでさあ」

再び桜さんからのクエスチョン。

「その戦闘支援する機械が、何故に零一くんのところに届いたのさ？」

もっともな質問である・・・単なる悪戯か宅配ミスとしか思えないけれど。

するとティルミットは

「はい。私はマスター・・・黒澄零一様に『使っていただくため』ここに参上いたしました」

と答えた。

いや、普通だったらホラあれだ。

『俺がキミを・・・使う・・・？』

とか武器的な意味で驚くシーンなのかもしれないけれど。

「『使っていただく』・・・！？」

「何に・・・？」

「なにに・・・？」

「ナニに・・・！？」

ホラなんかもうさっきと同じような情景が・・・！！

突然喋って動くオーバーテクノロジーが送られてきたってのに！この人たちは！

「ちよっと！俺がこの娘を何に使うと思ってるんですか！」

「ナニに使うと思ってるなんて大声で言うな！」

言ってますせん！心の底から言っていないッス！

そんなやり取りが延々と続き、結局この日も部屋のダンボールは片付かないのであった。まる。



拝啓、大悟叔父さん・亜樹叔母さん・みちる、お元気ですか。  
俺がかがみ荘に越してきてから何日か経ちました。

住人の皆さんもとてもいい人たちばかりで、毎日がとても楽しいです。

さて、話は変わりますが。

住人の皆さんの誤解の種となった人形の送り主に心当たりはないでしょうか。

いきなり送られてきてかなり困って、もとい弱っています。

もし心当たりがある場合はすぐにそちらに送り返すので教えてください。

よろしく願います。

敬具

零一

追伸..本当に弱っています

つづく

## 第二話 お届け物だよっ!! (後書き)

ピンポーン、とチャイムが鳴り響いた。

無論俺の部屋のものではなく、かがみ荘の外付けチャイムだ。数秒遅れでパタパタと玄関へ向かう足音がした。

「・・・ん、いけね」

そっちの方に気をとられすぎてもいけない。

俺は再び自分の作業へと没頭する。

部屋中に畳まれ並べられた俺の服。今は衣替え中であつた。

「つても、畳んでタンスに入れるだけなんだがね」

誰にでもなく一人ごちる。独り言が多いのはもともとなので気にしない。

小さめとはいえダンボール二箱分の衣服たち。夏物に冬物や下着と、カテゴリは多い。

とりあえずダンボールの中身を全て取り出し、たたんである今の状態にするまで、結構な時間がかかった。

ここからカテゴリ分けしてタンスにしまっていくのだ、と思った矢先に。

「零————!!!!!!」

どがんとドアを破壊しそうな勢いで部屋に飛び込んできた鈴葉がまず入り口付近のパジャマ類を踏みつけこけた。

こけた勢いで部屋の奥にいる俺のほうまでヘッドスライディングの形で接近してくる。

無論周囲のたたんである衣服も巻き込んで。

うきやーと絶叫する鈴葉。うわぁ・・・と絶句する俺。

部屋に広げられた衣服の半分以上を吹き飛ばして、やっと鈴葉は停止した。

うつ伏せでバンザイのような格好で衣服の海にダイブした鈴葉は、  
がばちよと顔をあげて言った。

「おもしろかった!」

「俺はおもしろくねえ」

返せ。俺の一時間を返せ。

「そんなことより、零一くんっ!」

俺の一時間はそんなこと扱いらしい。ちくしょう。

いじける俺を気にすることなく、鈴葉は続けた。

「零一にお届け物だよっ!」

「――で、なぜ皆さんここにいますのでしょー」

かがみ荘ラウンジ。配達されてきたという俺宛の荷物は、テーブル  
の上に置かれ、かがみ荘の住人たちによって包囲されていた。

「なんでってホラ! 何が届いたのか気になるじゃない!」

「そうそう。零一くん、お年頃だし・・・」

この管理人姉妹、ノリノリである。

まあ、それよりも、だ。

「おとしごろ? おとしごろだと、何か届くの?」

という鈴葉の質問に

「・・・エ○DVDとか」

って伏字になってない伏字で回答している有珠サン!?

「いい年の女の子が堂々とそんなことを言うなっ!」

念のため言っておく、俺の部屋にはDVDプレイヤーはおろか、ビ  
デオデッキすらない。

念のためです。

「ま! そんな虚言も包装を解けば白日の下にさらされるサ!」

言いながら荷物を俺のほうへずずいと押しやる桜さん。

荷物というより小包と言ったほうが正しいそれは、ビデオテープ大

の長方形をしていた。

一瞬、本当に叔父さんが一人暮らしで寂しい俺にそういう類のビデオを送ってきたんじゃないかと躊躇ってしまう俺。だが、宛名欄を見てその考えは吹き飛んだ。

K県紅津市参円瑚2-4-6 かがみ荘

零一様

「・・・あれ？」

首をかしげる。この宛名欄はおかしい。だって・・・

「・・・差出人が書いてない」

横から覗き込んできた有珠が言う。

そうなのだ。書いてあるのはかがみ荘の住所と俺の名前だけ。差出人の欄は空欄になっていた。

「それに、下の名前しかないってのもね。やっぱりなんか後ろめたいモノだと私は考えるね！」

自信满满そうに言う桜さん。でも本当に、俺には心当たりがない。叔父さんの家に忘れたものを叔父さんが届けてくれたのだろうか？でもそうしたら俺に電話の一本くれるだろうし、差出人の欄を空欄にする必要もない。

ひょっとしたら従姉妹のアイツの仕業か、とも思ったが、アイツはこういう悪戯はしない。悪戯するなら直接乗り込んでくるはずだ。宅急便なんて回りくどいことは、しないはずだ。

そういった理由で俺は訝りながらも、たいした警戒もせずに包装を解いた。

包装紙を破いた中から出てきたのは銀色に輝く小さめのアタッシユケース。

それが姿を見せたとたん、周りの空気も一変する。

差出人不明の郵便。

シルバーのアタッシユケース、とくれば。

「ば、爆弾・・・？」

しかし耳を当てても、ケース内から物音はしない。当然だ。少なくとも映画でよく見る時限爆弾じゃあないな、と自分の考えを軽く笑い飛ばし、ケースを開く。

中には女の子の人形が入っていた。

思考フリーズ。

周りの空気が一変したことを肌で感じる。

つうか、なんかすごく痛い視線感じるんですけど・・・！！

ケースの中には衝撃防止材に収まるように女の子の人形が入っていた。俗に言うフィギュアとゆう物である。

パツと見生きているように見えるほど精巧な造り。凛々しい顔の双眸は閉じられている。

それが女子高生の制服のようなものを着ていたから、きっと・・・

「・・・アンタ、まさかそういう趣味だったんだ・・・」

「あらあら。ラウンジで開けるべきじゃなかったわねえ」

「・・・予想外」

「零一、女の子のお人形で遊ぶの？」

きつと皆さんの視線がこんなにも痛いんだろうな☆

「って！ちがう違う違います！こんなもの俺が買ったんじゃないって

————！！」



「アンタが買ったんじゃないやなくて誰が買ったのよ!!」

だからそれはこっちが聞きたいって!

「別にいいのよ、零一くん。人には人の趣味ってものが――」

「だからそうじゃなくてッ!」

つうか茜さん、そういう生半可に温かい目で見られるのが一番キツイです!

「零一」

「な、なに……」

「見直した。……違う意味で」

だから人の話を聞いてくださいお願いします!!

「零一、女の子のお人形であそぶの?」

だから話を聞けえええええええ!!!!



解けない誤解の渦中で俺はノックアウト寸前だった。

降り注ぐ哀れみ、軽蔑の目。

一体何処の誰かは知らないが、これを送った奴が分かったら、全力で一発ブン殴ってやらなくては気がすまねえってもんである。

半分泣きそうになりながらも、誤解を解けるようなものがないかとケースの中をもう一度見る。

眠っているような女の子の人形と、その隣に一枚のカードらしきものが収まっていた。

「……こっちは何だ?」

と、カードを手取る。

薄く青い、免許証くらいの大きさのカードは金属で出来ていた。

キャッシュカードのような、黒い磁気のラインは入っていない。一体何のカードなのだろう。

兎に角、このカードには今のところ特に意味はないようだ。箱に戻し、隣の眠り姫に目をやる。

うう、やりたくないけど見てみなきゃわかんないのか・・・。人形をそっと掴む。思ったより肌の部分がやわらかくて何故かドキツとする。

強く握らないように慎重に箱から取り出した瞬間。

彼女の背中からピンのようなものが抜けて、眠り姫は目を覚ました。

「――っ!!」

突然手の中で目を開いた人形に、声も出ず驚く。

人形は目を開くと、俺には聞き取れない速度で何かを呟きだした。

同時に彼女の瞳の中を英字が高速でスクロールしてゆく。

驚きで固まってしまい、何も出来ない俺たち。

十秒弱でそれはおさまった。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

誰も何も言いません。

高速で文字が流れることもなくなった人形の瞳が俺を正面から見据えた。

「え、えっと・・・」

「網膜スキャンを開始します」

喋った!と驚くまもなく、彼女は俺の掌からふわりと飛び立ち、俺の(文字通り)眼前でぴたりと停止した。

なんだこいつ浮いてる。そういえば彼女の背中あたりに何か浮いてるなーなんて考えた瞬間。

「えいっ」

彼女の掌が俺の左目に炸裂した。

「――っってえッ!!」

思わず叫ぶ。いやいや、誰だって眼球直タッチされたらこれくらい当然朝飯前ってやつだろう。

「痛えな！いきなり何すんだよ！！」

左目を押さえながら猛抗議。それに対するお人形さんの反応。

「網膜。及び声紋スキャン、終了しました」

シカトかよ。

網膜と声紋のスキャンを終了したらしい人形は再び俺の掌に収まり、キリっとした表情で俺を見て言った。

「本人確認97%終了。『剣耶零一』様と認識してよろしいでしょうか？」

「つる・・・なんだって？」

「つるぎや剣耶零一様です。誤認ございませんでしょうか」

確かに俺は零一様であるが、つるぎやなんていう苗字ではない。

黒澄姓は叔父さん夫婦に引き取られる前からの苗字だと聞いていたし・・・。

「・・・えっと、違います、よ？」

控えめに言うと、人形は首を横に傾げたまま言った。

「そんなはずはありません。網膜、声紋共に剣耶零一様のデータと一致します」

「そういわれてもなあ・・・」

なんかの手違いで俺の情報でも紛れたんじゃないだろうか。

少なくとも俺は初対面の相手の眼球を潰しにかかる人形を送ってくるようなところに心当たりはないわけだし。

考えながら人形に目をやると、彼女は俺の右手の人差し指を両手で掴み、彼女の体、言っちゃえば胸の辺りに押し付けていた。

なるほど。さっきから感じていたやわらかさの正体はこれか。

つうか、機械なのにやわらかいところはやわらか

突如感じた悪寒に振り返ると。

「・・・ひそひそ」

「・・・ひそひそ」

「・・・ひそひそ・・・」

「ええーっ！ そうなの？ そうなの！？」

と、仲良く内緒話なんぞしている四人組がそこにいたわけで。

「ちっ、ちがいます！ 違うんです！ 話を聞いてください！」

なんかついさっきに言ったような台詞だな。

「ちょっ！ お前も！ 何してんだよ！」

人形に向かって言うと、人形は屹然とした表情で

「指紋照合完了。『剣耶零一』様のデータと99.89%一致しました」

なるほど指紋照合かぁ。って。

「・・・もっと他にやり方があるんじゃないだろうか・・・」



一段落して。

必死の弁解の末、桜さんたちの誤解はなんとか解けたようだ。

「・・・うん、解けてたらいいなあ。」

「・・・で、結局アンタはなんなのよ？」

ソファに腰掛けた桜さんが少女に尋ねた。

「私は総合戦闘支援ユニット、認識番号TLM-8700-『テイルミット』と申します」

俺のひざの上あたりでふわふわ浮いている少女―テイルミットが答えた。

「戦闘支援ユニット・・・？」

「はい。私は使用者の戦闘中のサポート及び戦闘そのものの支援を行うために製造されたものであります」

なんだか俺の間近で俺にはわからない世界が展開しているようだ。

戦闘とかサポートとか。なんか物騒だなあ。

有珠の次は茜さんが質問をした。

「それで、誰があなたをここへ送ってきたんですか？」

「申し訳ありません。ここへ来る以前のメモリーにはロックが掛かっているのです、皆さんにお話しすることはできません」

「零くんにも、ですか？」

「そうプログラムされています」

静まり返るラウンジ。なんとなく気まずくなって、俺が質問をした。

「・・・えっとさ、俺のことを剣耶って苗字で呼んでいたけど」

「はい。あなたのデータは『剣耶零一』様でインプットされています」

「下の名前に間違いはないんだけどさ、俺の苗字『黒澄』っていうんだよ」

言うときテイルミットは少し首をかしげた。

「・・・しかし、あなたは」

「うん、だからさ、多分間違ってる俺のデータが入っちゃったんだよ。送り主が住所とか間違えて――」

「それは有り得ません」

ぴしゃりとテイルミットは言い切った。

「そのようなことがあるはずがありません。了解しました。ではあなたのデータを『黒澄零一』様で再入力します」

「・・・・・・」

そんな簡単にデータ変更しちゃうんですか。

「ねえねえ、んでさあ」

再び桜さんからのクエスチョン。

「その戦闘支援する機械が、何故に零一くんのところに届いたのさ？」

もったもな質問である・・・単なる悪戯か宅配ミスとしか思えないけれど。

するとティルミットは

「はい。私はマスター・・・黒澄零一様に『使っていただくため』ここに参上いたしました」

と答えた。

いや、普通だったらホラあれだ。

『俺がキミを・・・使う・・・？』

とか武器的な意味で驚くシーンなのかもしれないけれど。

「『使っていたでく』・・・！？」

「何に・・・？」

「なにに・・・？」

「ナニに・・・！？」

ホラなんかもうさっきと同じような情景が・・・！！

突然喋って動くオーバーテクノロジーが送られてきたってのに！この人たちは！

「ちよっと！俺がこの娘を何に使うと思ってるんですか！」

「ナニに使うと思ってるなんて大声で言うな！」

言ってますせん！心の底から言っていないッス！

そんなやり取りが延々と続き、結局この日も部屋のダンボールは片付かないのであった。まる。



拝啓、大悟叔父さん・亜樹叔母さん・みちる、お元気ですか。

俺がかがみ荘に越してきてから何日か経ちました。

住人の皆さんもとてもいい人たちばかりで、毎日がとても楽しいです。

さて、話は変わりますが。

住人の皆さんの誤解の種となった人形の送り主に心当たりはないでしょうか。

いきなり送られてきてかなり困って、もとい弱っています。

もし心当たりがある場合はすぐにそちらに送り返すので教えてください。

よろしくお願いいたします。

敬具

零一

追伸…本当に弱っています

つづく





### 第三話 この街が大好きなんですよ（前書き）

かがみ荘にティルミットがやってきて、数日が過ぎた。  
ティルミットは段々とかがみ荘の面々に受け入れられて、晴れて俺のおかしな趣味疑惑も晴れた。  
まあたまに桜さんあたりが冷たい目つきで俺を見てきている気がするけど。

学校までまだ日の残る春休み。

暇を持て余していた俺は、退屈な時間をもっぱらラウンジで過ごしていた。

ラウンジにはテレビとソファ―等応接セットがあり、家具の少ない自室で過ごすよりも快適に時間を潰すことができるのだ。

俺がラウンジに居ると、大体いつも鈴葉とティルミットがついてくる。俺たちはいつもごろごろしたり、テレビを観たりしていた。

『でもね奥さん、アンタにもその原因はありますよ？』

ある日の昼。働きすぎで有名な白髪の司会者が生電話で視聴者の疑問に答えていた。

それを真剣な面持ちでみている鈴葉とティルミット。正直この絵は見ていておもしろい。

が、テレビの内容はあまりにも退屈だったので。

「えいっ」

「「あぁーっ!!」」

あ、チャンネル変えただけでこいつらハモった。

「ひどいよ零一！鈴葉がみてたのにー！！」

「そうですマスター！私も今の番組には興味があります！」

「・・・ミノさん見て喜ぶって、何処の主婦だおまえら・・・」

ぼやきつつ、俺は視線をテレビにもどす。

『一のバジルを加えて、先ほどの鶏肉をー』かちっ。

『一涛合体、アーク！グレーー』かちっ。

『一以上現場である紅津市から、私野田がお伝えー』

「え？」

チャンネルを回す指が一瞬止まった。

現場？べにつし、って言ったよな今・・・。

その番組を見ると、右上に《ついに11人目！紅津市連続切り裂き魔！》というテロップが表示されていた。

「11人目？鈴葉、これって・・・」

「いいから零一！ミノさん、ミノさんだよっ！！」

「わっ、こら、やめろー！！！！」

「申し訳ありませんがマスター。ミノさんの為です！」

結局鈴葉&ティルミットコンビによりリモコンは取り上げられ、先ほどのニュースをそれ以上見ることは出来なかった。

俺がここに越してくる前からこの通り魔じみた犯行は起こっており、犯人は毎晩必ず若い女性一人ずつをナイフで斬りつけているという。更に犯人はまだ捕まっていない、という事実を知ったのは、これより少し後の話だった。



### 第三話 この街が大好きなんですよ

白鷺美月は、夜の紅津市を歩いていった。

駅から教会までの暗い道のり。佇むのは街灯の灯りばかりで、あたりには人の姿は見当たらない。

それもそうだ、と彼女は苦笑する。駅の時計は彼女が見たとき既に12時近くを指していたし、そんな時間にこの道を通る人間はそういないからだ。

教会までの道程には商店などはほとんど無く、あるのは民家や小さなアパートメントくらい。このあたりに住む人間でなければ、こんな道はそう通らない。

しかしそれも住み込みでシスター見習いをやっている彼女には見慣れた景色で、こんな時間にも関わらず彼女は危機感など露ほども持ち合わせていなかった。

なのでこの日の彼女の小さな不運は、単に夜間だからという警戒心を持たなかったことなのだろう。

背中にギターケースを背負い、街灯の灯りのみを頼りにとてとてと道を行く美月。

「やっぱ遅くなっちゃった・・・。神父様もう寝てるかなー」

携帯電話を取り出すと、時計は既に日付が変わった後の午前0時13分を指していた。

もし神父様が起きて待っていてくれたら大変だ、と彼女はすこし早足気味になる。

そのあまりにも無防備な背中を――。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

彼は、狙っていた。

肉厚のナイフを握り締める。

彼の武器といえるのはそのナイフと薬物により増強された肉体くらいなものだった。

が、それも一人の少女を重症に至らしめるには十分すぎる得物である。

息を、足音を、影を殺してひっそりと彼女の背中に近寄る。

男は今一度ナイフを握りなおす。美月までの距離はおおよそ5メートルといったところだ。

存在を消してにじり寄る。

前を歩く無防備な少女の背中に、これから自分がするであろう行為を想像すると男の身体に恍惚が走った。

残り2メートル強。いいだろう、もういいだろう、と男は自分に言い聞かせた。

・・・もう、やってしまってもいいだろう。

ナイフが牙をむく。

残りの2メートルが一度の跳躍でゼロになる。

背後からの物音に振り向く美月。

振りあがる男のナイフが月光に煌めく。そして――――

「・・・・・・・・っおらあああああっ！！！！」

気合一撃とばかりに男の首に叩き込まれるハイキック。

ミチリ、と骨と肉のきしむ音が男の首の付け根から響いた。

一瞬男と視線が交錯するが、『彼女』はそんなことは少しも気にし

なかった。

そのまま男の首に叩き込んだ右足を左足を軸に体ごともう半周させる。

回し蹴りの要領で蹴られた男の身体は一瞬宙を舞った後、石畳に叩きつけられ地面を転がった。

「がっ……！！！」

苦悶の声を上げながら仰向けに倒れる男。

それに一瞥をくれた後、美月と男の間に乱入してきた彼女——各務桜はちらりと背後を振り向いた。

「怪我とか、ない？」

「へ？……あ、はい！ないです！」

突如として目の前で繰り広げられた展開にようやく追いついた美月。彼女の返事を聞くと、桜は倒れ伏す男に向き直り、背中を向けたまま言った。

「んじゃあさ、ちょっと急ぎ足でお家に帰って貰えないかな？あの男、まだ」

そこまで言った瞬間、背筋を凍らせるような殺気を感じ、桜は顔をとっさに右に逸らす。

一瞬遅れて男のナイフが桜の髪を撫ぜた。

切断された髪がはらはらと地面へ零れ落ちる。

「……っ！！」

かわした体を捻って勢いを殺さず後ろ回し蹴りを放つ。

男はそれをひらりと後ろに飛んで避けると、体勢を低くとり、桜と向き合った。

「貴女、このまま振り向かないで走って、家まで帰りなさい」

「え、でも……」

「早く！！」

わけもわからず、美月は教会までの道を走り始めた。

彼女の足音が遠ざかっていくのを聞き届けると、桜は眼前の男に集中する。

男は姿勢を低く構え、眼前にナイフを握り締めたまま動かない。

「・・・あんたが、今話題の切り裂き魔ってやつ？」

男は答えず、口の端を吊り上げてにい、と笑った。

直後、低い姿勢のまま桜に肉薄する。

見切る一閃。頸動脈を狙って振るわれた一撃を首を逸らしてかわす。続いて胸を狙った突きを避ける。避けきれず左腕をかするナイフ。衣服が裂け、血がにじむ。

立て続けに足を狙って振るわれる一閃を跳んで避ける。

浮いた右足から反撃の蹴りを繰り出す。受けた男の腕がメシメシと音をたてた。

後ろに距離をとりながら、まずいな、と男は直感する。この女の身体能力は自分のそれを大きく上回っていると判断する。

玉碎覚悟の特攻も考えたが、それで重傷をおってしまったては意味が無い。

男の目的は「なるべく多くの人間をナイフで切り裂く」。それ以外の欲望など無いのだ。

一旦、退こう。

分が悪いと判断した男は、ナイフを左手に持ち替え、蹴られ痛む右腕を後ろ腰に回した。

「あん？なんか隠し玉でもあるの？まさか銃とか？」

桜は少しの余裕を感じ、ニヤつきながら男を睨む。

が、男はいつまでも後ろ手の形のまま動こうとしない。

普通ならばここで無闇に突っ込むような真似はしないのだが、実力の開きを感じ、男を侮っていた桜は、

「そっちからこないなら・・・！！！」

と、男との間合いを詰めてしまった。

その瞬間を待っていた、と男は腰から投擲用のナイフを抜き、身体を捻って桜へ投擲した。

空気を切り裂いて桜の顔めがけて飛ぶナイフ。

ここは一旦退くが、次回この女と仕合うことも考えて片目くらいは

奪っておこう——。

男のそんな考えはしかし、あっさりと碎かれる。

「甘いっ!!」

桜は飛んできたナイフを受け止めるように、ナイフの腹を掴んだ。普通でも掌が傷つく。ましてあの速度なら指の一本飛んでもおかしくは無かった。

が、見れば桜の手はナイフを掴んではない。

桜の手から発する青い光が、ナイフを空中で止めていたのだ。

「・・・てめえ、てめえも」

言いかけた男の顔面めがけて投げ返されるナイフ。

男はそれを左手のナイフで打ち下ろすと、本格的に逃げる算段をつけた。

「どうしたの? もうオシマイ?」

余裕げに男をねめつける桜。男は観念したように言った。

「いやあ、コイツはまいったよ・・・今回はこれでー」

言って、後ろ腰の、今度は小さな筒のようなものを地面にたたきつけた。

カァン、と石畳が甲高い音を立てる。

「ー見逃してもらおうとするぜ!」

「逃がすかッ!」

途端地面を転がる筒から、白煙が噴出する。

「ッ!? 煙幕!」

「ハッハ!! あばよ女ア!」

「待て!!・・・この! 最近こればっか逃げられてるわね・・・!!」

待てこらー、と叫ぶ桜を尻目に、男は煙の幕から抜け出し、港目指して走った。





「・・・はあ、はあ」

息を整え、後ろを振り向く。

万が一のことを危惧していたが、どうやら先程の女は追ってきていないようだ、と男は嘆息した。

男はそのまま海沿いの道を歩き、自分のねぐらまで帰るつもりである。

——一体なんだったんだ、あの女は。

その女・・・各務桜はありえない力で男を蹴り飛ばし、斬撃を避け、終にはナイフの投擲すらを素手で止めた。

最後のひとつなんかはあの距離からでは確実に避けようもない、決まり手だったはずだ。

それを素手で止める。常人ではない。

・・・だとすればあるいは、あの女のような・・・？

そこまで考えたことを払拭するように首をふる。いや、よそう、そんな考えは持たずにおこう、と。

思考の海から抜け出してみれば、男のねぐらはもうすぐだった。

この街に似つかわしくない倉庫の群れの、この角を——

曲がった瞬間それは居た。

それはまるで人間のようにだった。

誰が見ても美人というだろう美しい女性が、男のねぐらである倉庫の入り口に居る。

小さなコンテナに腰掛けたそれは、まるで男には気づいていないかのように手にした文庫本に視線を落としていた。

男は思う。あの女が俺に気づいているはずが無い。足音を殺して近寄り、今日の獲物とすればいいのでは、と。

しかし男の身体は、脳の正常なはずの考えを異常なまでに否定していた。

―やめろやめろやめろ！！おまえじゃ歯が立たない！背中を見せて走れ！命を無駄にするなここから逃げろ！！

人畜無害そうな女性のヒトガタを前に、男の身体は必死で後ろへ走り出そうとする。

だが気づけば身体は前にも後ろにも動かず、男はその場に棒立ちに縛り付けられていた。

「桜ちゃんがここに来ない、ってことは・・・」

女のヒトガタが口を開いた。澄み渡るような美声が夜の港に響く。呟くような声はしかし、男の耳にしっかりと届いていた。

「・・・あの子もまだまだ甘いというかなんと言うか。誰に似たのかしらねえ」

それはきつと独り言だ。男には関係ない妄言だ。

その視線はまだ文庫本に落とされたままだ。

まるで、男の存在を許容しながら男を無視しているかのように。

気づけば男は、

「・・・た、すけて、くれ」

切り裂き魔である男は、初対面の、しかも敵とも認識してすらいない相手に、命乞いをしていた。

男自身、なぜそんな言葉が真っ先に浮かんできたのかなんてうかがい知れない。

女との十メートル弱の距離。これさえ詰めれば男はいつものパターンで彼女を重傷せしめることが出来るはずだ。

が、男の脳内には距離を詰められるというただそれだけのイメージがまるで沸いてこない。

それどころか、たとい距離を詰めたとして、自分が勝てるという考えすら浮かんでこなかった。

男が眼前の女に抱いたイメージはいたってシンプルで、原始的な感情だった。

人はその感情を、その存在を「死」と呼んだ。

眼前の死はニコリと笑って文庫本を閉じる。

「助けてと、貴方は今そう言ったのかしら？」

男は自分の言葉が届いたことにほんのわずか、安堵する。

「あ、ああ！ そうだ、頼むから命だけ」

「どうして」

短く、ぴしゃりと女は言い放つ。

「どうして貴方は、初対面であるはずの私に対して、そんなに怯えているのかしら？」

それは至極もつともな発言である。が、その理由は男が知りたいくらいだった。

ただ、本能的にこの女には勝てないと、勝てないどころかこのままここにいたら——という感情が湯水のようにわいてくるのだ。

「それに、もうひとつ」

女の指がすっと伸び、棒立ちのまま固まっている男を指差した。

「どうして私が、貴方を助けなくてはいけないのかしら？」

瞬間、男の背筋が凍りついた。

そして瞬時に理解する。ああ、この女は俺に対するすべてを当然のように知っていてこの場所にいるのだと。

そして今の言葉からするに、このままでは俺は・・・！！

「私はね、この街が大好きなんですよ」

女がコンテナから腰を上げた。

「海が綺麗で、街並みもととてもきれいだ。住んでいる人たちもみんな暖かくて、優しい人ばかりで——」

女はにこやかに語っている。

男の呪縛が霧散する。指が動く、腕が、足が、体が動く……！！起死回生一発逆転、生き残るチャンスはここを除いて存在し得ない。女が余裕たっぷりに語っているのを好機とし、男はベルトの両脇に挿してあるナイフを引き抜いた。

そしてそのまま、体全体のパネを使って、一気に女に向かって跳躍する！

「う、あああああああああああああああああああああああ  
あああああああ！！！」

起死回生、一発逆転のその一撃はしかし、

「——そんな素敵な街を汚す人間を、私が赦すと思いますか？」

冷淡な一言であっけなく幕を迎える。

]

男の眼と脳が最後の瞬間に記録したものは、何事かをぼそりと呟い

た女の口の動きと、突き出された右手から放たれた、目もくらむばかりの光だった。



「・・・続いて、ニュースです。今日未明、K県紅津市の港において、正体不明の――」

「わー、すげえ。地上から空に向かって流れる流れ星だってよ」

「流れ星ー？たしか5回お願い事を言えば叶うんだっけ？」

「鈴葉さん、それは正しくは3回です。そもそも何故3回かといいますと・・・」

「・・・」

朝のかがみ荘ラウンジでは、最近のラウンジ常連である俺たちに加え、珍しく有珠が居た。

「鈴葉ちゃんは流れ星がきたらなにをお願いするのー？」

「レールガンが欲しい、かな・・・」

「・・・レールガンって何？」

などと不毛な会話をしているうちに、朝のニュース番組は終わった。今日は珍しく噂の切り裂き魔のニュースが一度も取り上げられなかったな。昨晩は切り裂き魔の犯行が起こらなかったのだろう。

「まあ、あそこまで警察沙汰になって続く事件の方がどうかしてるか・・・」

「あんたら朝からきゃーきゃーぴーぴーうっさいわよ」  
眠たそうな目を擦りながら、ラウンジに桜さんが現れる。珍しいことは重なるものだ。

「あ、桜ちゃんおはよー!」

「だあからうっさいっての! 頭に響くわ!!」

あー、と頭を押さえる桜さん・・・って、あれ?

「桜さん、髪切ったんですか? 微妙に短くなりましたよね?」

「ん? ああちよつとね。事故で無くしちゃってさー。おかしかったから切りそろえたのよ」

「・・・髪の毛微妙になくす事故ってなんすか」

まあ桜さんのことだ。マッチとかいじっていたら髪に火がついたということも十二分に考えられる。

そんな邪な考えを見抜いたのか、桜さんは俺に向かってコーヒーを入れてくるよう命令すると、ラウンジのソファにうつ伏せに寝転んでしまった。

しょうがないですねー、と俺はラウンジを立った。

・・・桜さんが少しへこんでいるように見えたが、きっと髪を事故でなくしたことにでも腹を立てているのだろう。

そう考え、俺は台所へと向かうのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8721c/>

---

かがみ荘へようこそ！

2010年10月28日04時12分発行